

Why do people want to climb

なぜ山に登るのか

Mt. Aso?

私たちにとって山は日常の風景であり、
日々の生活の一部です。
その存在はあまりに身近で、
時にその大切さを忘れてしまいそうになります。
8月11日は「山の日」。
山に親しみ、山の恩恵に感謝する日です。

一歩立ち止まり、
身近な山の姿を見つめ直してみませんか。

「なぜ山に登るのか」

それぞれのストーリーは、
山に囲まれた私たちのまちのことを
もっと好きにしてくれるはずです。

あなたの好きな阿蘇山をシェアしよう

山の日記念阿蘇山フォトコン開催中



8月11日の山の日を記念して、阿蘇市公式Instagramでは「阿蘇山フォトコン」を開催しています。阿蘇山を対象に撮影された作品が対象です。阿蘇市公式Instagramをフォローし、#my_aso_tozan2023をつけて投稿してください。上位入賞者には豪華なプレゼントもあります。応募は8月11日(金)まで。あなたの好きな阿蘇山を世界中の皆さんと共有しましょう。

なぜ山に登るのか

最高の景色を求めて



📷1

- 📷1 中岳山頂付近
- 📷2 火口東展望所から望む中岳火口
- 📷3 雲海を写真に収める
- 📷4 高岳山頂付近からの阿蘇市街



高1592メートルから見下す阿蘇谷の景色は、雲海とはまた違う爽快感を楽しめます。

山頂では「高岳」と記された標識と共に写真を撮影した女性。登山中に撮影した写真は逐一SNSで共有し、これまでにない数の反応が寄せられたそうです。「雲海の写真が一番です」。女性はうれしそうにスマートフォン画面を見せてくれました。阿蘇の山々が多くの人々を惹き付けたということでしょう。「また来たかった」。夏の阿蘇を眺めながら女性は言いました。

歩き始めて約1時間、右手に中岳の火口が見えてきます。火口東展望所です。「まるで異世界」。荒涼とした風景に驚きの声が上がりました。ごつごつとした岩場をさらに進むと高岳山頂です。登ること約2時間半。雲海はすでに消えかかり、眼下には阿蘇市街が広がっていました。青々とした水田の中に点在する集落。標

を切っていました。

午後5時、期待と不安を胸に登山開始。高岳へ向かう4つのルートのうち、仙酔峡ロープウェイ跡ルートを歩きます。振り返ると、朝日に照らされた雲海。長く続く登り道に苦しそうな顔を見せていた女性でしたが、この絶景に疲れも吹き飛んだのでしょうか。スマートフォンを取り出し、興奮したようすでシャッターを切っていました。

楽しみ」。高岳を眼前に臨む仙酔峡駐車場で女性が吹きました。時間は午前4時40分。東の空は白み始めていました。女性は菊陽町から訪れた登山者。阿蘇山に登るのは小学生のとき以来と話します。「最後まで登れるかな」

日本百名山にも数えられ、多くの人が登山に訪れる阿蘇山。一人の女性の登山デビューに密着しました。



新見学エリアEゾーン Q & A

Eゾーンは
いつでも見学できるの？

A
Eゾーンを見学できるのは、Bゾーンの火山ガスの濃度が高く見学できないときで、Eゾーンの火山ガスの濃度が5ppm未満のときです。
開設されるのは8月10日からですが、実際に見学できるかはその日の火山ガスの状況次第です。

Eゾーンにはどうやって行くの？

A
阿蘇山上ターミナルを発着する専用バスでのみEゾーンに行くことができます。自家用車では行くことができません。
Eゾーンではバスの外から見学できます。見学時間は約15分。所要時間はバス出発から約30分です。

- ※バスは運賃がかかります。
- ※Eゾーンの火山ガス濃度が基準値以上の場合は運行しません。
- ※トイレはありません。乗車前に済ませてください。



「二百十日」は立春から210日のちょうど9月1日ころ。Eゾーンの運用開始と二次避難施設の利用は、二百十日を前にした8月10日から。圭さんたちが辿り着けなかった晩夏の中岳。圭さんたちに想いを馳せながら目指してみるのもいいかもしれません。

Eゾーンの整備には環境省の補助金も活用。道路、見学エリア、転落防止柵、ガス検知器を市、退避壕2基を県が整備しました。
Eゾーンではすぐ下に火口を望むことができ、その眺望はBゾーンよりも優れているとされています。Eゾーンの整備は、火口での新たな体験の創出にも繋がると期待されます。
市は、Eゾーンと合わせて、ロープウェイ駅舎跡地に避難所の機能を持った二次避難施設整備も進めてきました。施設は鉄筋コンクリート造の平屋建てで、中には休憩スペースや救護室、トイレ、案内所を設けています。

ゾーンとは方角が異なる箇所に設けられ、火山ガスによりBゾーンの立ち入りができない時に限り、専用バスでのみ立ち入りができるようになります。



なぜ山に登るのか

火山の息吹を求めて



新たに整備された二次避難休憩施設



すでに公開されているBゾーン。ドイツから訪れたカベラーさん一家は初めて見る火口に「Beeindruckend！（感動したよ）」



そのときどきで表情を変える中岳第4火口。ことし6月、7つの火口を眺められる遊歩道も完成した。

しかし阿蘇へ登りに来たんだから、登らないで帰っちゃあ済まない」
夏目漱石の小説「二百十日」の主人公・圭さんが、噴火口を見るのを諦めて熊本へ戻ろうと言う同行者・碌さんに放ったことばです。圭さんたちは前日、中岳へ向かう途中に遭難しかけて登山を断念していました。噴煙を上げる中岳第一火口を前に、圭さんと同じ気持ちになった観光客が何人いたことでしょうか。近年は火山ガス規制などで年間の見学率が6割弱となっており、見学入口ゲート前まで来たものの、ガス規制で入れずに落胆しながら引き返す観光客の姿は珍しくありませんでした。

新見学エリアEゾーンと二次避難休憩施設

見学率の向上につなげようと、火口の北西部に整備が進められてきたのがEゾーンです。北風の影響を受けやすいこれまでの見学エリアB

阿蘇観光の目玉として多くの観光客を受け入れてきた阿蘇山上エリア。熊本地震や噴火からの復旧も進み、火山見学が大きく変わろうとしています。

4 / 先輩たちが通った道に思い馳せ
15 阿蘇トレイル女学院



女性限定のトレイルランニング大会。県内外から157人が参加し、坂梨の熊本NOK株式会社をスタート・ゴールとする約15キロメートルのコースを走った。コースの一部は、明治～昭和時代に宮地の女学校への通学路として使用していた。参加者は当時の学生に思いを馳せながら、それぞれのペースで駆け抜けた。

5 / カルデラを走り尽くす
13-14 ASO VOLCANO TRAIL



阿蘇地域で最大規模の大会。ASO MILK FACTORYから南阿蘇村のアスペクタまで、約110キロメートルを走る。411人がエントリーし、131人が完走した。古道や草原の整備活動へも参加できるエントリー枠も設けられ、阿蘇の成り立ちにも触れた。

森本さんは、トレイルランニングを「自分と向き合う時間」と表現します。「山では全て自己責任。この装備で大丈夫か、体調はどうか、体力は持つのか。常に自分自身と向き合い続けなければなりません。自分と向き合い続けたその先に、達成感やきれいな景色が待っています」。世界の舞台で自身を見つめ続けてきたそのまなざしは、ふるさとである阿蘇にも向けられています。

トレイルランニングとは

阿蘇で開催されるトレイルランニングのイベントでは、参加者が阿蘇に貢献できるような仕組みが取り入れられています。例えば、外輪山の約100キロメートルのコースを走る阿蘇ボルケーノトレイルでは、一般のエントリー枠に加え、古道や草原の整備活動への参加が可能になる枠が設けられたほか、参加料の一部は草原の維持・再生に取り組み団体に寄附されました。「阿蘇の景色や草原を楽しむだけでなく、その成り立ちや、地元の人たちの苦勞も知ってほしい」

Trail Running

今、トレイルランニングが熱い

ことし、阿蘇市ではさまざまなトレイルランニングの大会が開催され、多くの人が阿蘇の自然を満喫しました。

2 / マラソン+ピクニック=?
4 阿蘇草原マラニック



食や自然を楽しみながら走るピクニックのようなイベント。県内外から171人が参加し、阿蘇草原保全活動センターと国造神社を往復する28キロメートルのコースを駆け抜けた。参加者は、それぞれのペースで自然を楽しみ、写真を撮ったりしていた。福岡市から参加した男性は「眺めが最高で気持ちよく走れた」と話した。

なぜ山に登るのが

自分と向き合う時間を求めて

山や草原など未舗装路を走るトレイルランニング。近年盛り上がりを見せるこの競技で、阿蘇市出身の森本幸司さんが日本代表として世界大会に出場しました。トップレベルのトレイルランナーである森本さんは、なぜ山を走るのでしょうか。



「自分でも、何が楽しくてこんななについことをしてるんだろう」と思います。トレイルランニングの魅力について質問すると森本さんは笑いながら答えました。「走っているときは『もう絶対しない』と思うけれど、走り終わってしばらくすると『もっと長い距離を』『もっと過酷な大会に』って考えてるんです」

トレイルランニングは山や森など自然の中を走る競技。岩場や急勾配、さらには天候の急激な変化など、過酷な環境で何十キロメートルも走り続けます。森本さんは、日本におけるトレイルランニングのトップランナーの一人。昨年に鹿児島県で行われた大会で優勝し、6月8日にオーストリアで開催された「マウンテン&トレイルランニング世界選手権」に日本代表として出場しました。

山を走るようになったきっかけ

日本を代表する選手として活躍を続けてきた森本さん。もともとは駅伝やマラソンが専門でした。山を走るようになったきっかけは高校時代。当時、阿蘇清峰高校の陸上部に所属していた森本さんは、国民体育大会の山岳競技に出てみないかと誘われました。現在

阿蘇から世界へ、世界から阿蘇へ

日本、そして世界の山々を走ってきた森本さん。各地のフィールドを走り、阿蘇のすごさを改めて認識しました。「阿蘇の山を走る体験は唯一無二のものだと思います。外輪山から見下ろす田園風景も、草原の緑も、砂千里などの火山の風景も、その全てが素晴らしいものです」。

大好きな阿蘇のフィールドのために何かできないか。森本さんは公務員を退職し、これまで国内外の大会に参加

は実施されていませんが、当時は、山岳競技として荷重を背負って登山道走るレースが実施されていました。この競技で森本さんは優勝。その才能を示しました。

その後は陸上競技に戻り、九州一周駅伝やマラソン大会などで活躍。再び転機が訪れたのは2013年でした。熊本県代表として出場してきた九州一周駅伝がこの年で終了。記録を求めて走ることに疲れを感じ始めていたこともあり、気分転換のためにトレイルランニングの大会に出場しました。森本さんはその魅力に改めて夢中になり、それ以降、走る舞台を山へと移していきます。



子どもたちと山に登る

登山道整備では大量の石を運ぶため、大変な作業になる。

渡邊裕介さん

阿蘇山では自然にあるものを使った登山道の整備が行われています。7月中旬、高岳で実施された整備に参加したアクティブネイチャーガイドの渡邊裕介さんに話を聞きました。



「ここ、崩れてますよ」。渡邊さんが登山道を指し示しました。

見てみると、確かに道の中央部がえぐられているように見えます。しかし、通行が困難になる程ではありません。「自然の中の登山道はこれくらい荒れているものなので」と問いかけると渡邊さんはこう答えました。「この道は人が歩くことでえぐれたものです」

渡邊さんは、人が歩くことで道が荒れていくメカニズムを教えてくださいました。人が何度も登山道を書くことで、植物は枯れ、表面の土が少しずつ削られていきます。表面が削られくぼみができるので、そこに雨水が流れるようになります。水の流れはさらに土を削っていき、そのくぼみは徐々に大きくなっていきます。大きく削られた部分の人が避け、本来は道でない部分を歩くようになることで、また新たなくぼみができます。この繰り返しで徐々にそこに生えていた植物が失われていくそうです。

「人も自然の一部であるとするな

なぜ山に登るのか

阿蘇の山を未来につなぐため



整備前の登山道

整備後の登山道

ら、その営みの中で山に入り、結果として山が荒れていくことも、自然の一部と言えるのかもしれない。ただ、

私たちにはそれを防ぐことができる以上、黙って見過ごすことはできません。渡邊さんは登山道周辺の自然が損なわれることを防ぐため、環境省と連携し、定期的に登山道の整備を行っています。大事にしているのは、なるべくその山にあるものを使用して整備を進めること。背負ったかごに石を拾い入れて運び、慎重に見極めながら道に敷き詰めていきます。「どう施工すべきか、自然が教えてくれます。どんな山なのか、どんな植物が生えていたのか」。自然をしっかりと観察するようになっています」

渡邊さんは、登山道を整備することで人が歩きやすくなり、安全な登山につながることを期待を寄せます。一方で、大事な自然本位の考え方もも指摘しています。「道が歩きやすいかどうかというのはあくまで人本位の考え方。そうではなく、登山道整備を通して道を本来あるべき自然の姿に戻した結果、人にとっても歩きたい道に変わっていくのではないかと思えます」。渡邊さんはさらに続けます。「人と自然とワインワインの関係を築いていけたら」

子どもたちと山へ

渡邊さんは、子ども向けの自然体験学習での指導にも力をいれています。子供たちを連れて山に登ったり、源流をトレッキングしたりなどそのプログラムはさまざまです。

渡邊さんは、こうした阿蘇での自然体験活動の中で、子どもたちに阿蘇のことを好きになってもらえたらと考えています。「将来阿蘇に何らかの形で帰ってきてくれたら、阿蘇のためにもなると思います」

一方で指導をする際は、こうした気持ちや子どもたちに押し付けることはしません。それぞれの子どもたちが興味を持ったことを大事にするように心がけています。「自然と子どもたちの橋渡しをしてあげれば、子どもたちはきっと阿蘇のことを好きになってくれると思います。それだけの魅力が阿蘇にはあると信じています」。

渡邊さんはどんなときも常に相手の立場に立って活動を続けてきました。渡邊さん以外にも、阿蘇の山を未来につないでいく取組みを続けている人がたくさんいます。渡邊さんたちの地道な活動は、人と自然が共存する未来への道しるべとなることでしょう。